

21

戦争

本田一弘選

「この世で最も愚かで醜い人の所業じゃ」(NHK大河ドラマ「とっする家康」)。
戦争の歌は人の愚かさ醜さを炙り出してきた。

【出征】

国のため戦争いくさに出づるますらをの親は人混ひれみにもまれて行きぬ(友人の長子の出征を送りて)

川田 順 『鷲』 1940年

【軍旗】

幼くて母の乳房をまさぐりしその手か軍旗ささげて征くは 柳原白蓮 『日本短歌』 1944年2月号

【軍馬】

さきつ頃むし暑く夜の貨車にみし軍馬ありしがいづへにかゆきし 遠山光栄 『杉生』 1943年

【軍需工場】

軍需工場のこと語りつつ泣きじゃくる父 つくづく思う「戦争は悪」 田中拓也 『東京』 2019年

【灯火管制】

手さぐりに母をたしかめて乳ちのみ児は灯火管制の夜をかつがつ眠る

五島美代子 『丘の上』 1948年

【空襲】

黒ぐると杭の如く立つこは繭の樹これは樗の樹生きながら焼けし

栗原潔子 『栗原潔子歌集』 1958年

【機銃掃射】

きりきりと地の底を噛む機銃音グラマンはたちまち友を殺しつ 石川一成 『麦門冬』 1975年

機銃掃射十七センチの差で助かりし十二歳のわれ武器は持たずき

前川多美江 『水のゆくさき』 2012年

【疎開】疎開っ子の吾の手鋭く傷つけしざりがに殺しいさぎよかりし

佐佐木幸綱『直立せよ一行の詩』1972年

B29の飛来するなか我を負ひ疎開をせむと山路行きし母

伊藤一彦『言霊の風』2022年

【焼夷弾】

身代りと思はば思へなくはなし焼夷弾の火に消えにし雛

斎藤佐知子『帰雲』2011年

【砲声】

砲声の熱きが頬にぶちあたり汗の滴が真横に流る

矢部雅之『友達ニ出会フノハ良イ事』2003年

【トーチカ】

銃眼から光さしこむトーチカの内部にいかなる言葉ありけむ

大口玲子『ザベリオ』2019年

【学徒出陣】

学徒出陣はじまりし年にわが生れて親しまず来つ死日本

伊藤一彦『火の橋』1982年

神宮外苑一人歩めば傍らの学徒の銃が肘にあたりぬ

田中拓也『東京』2019年

【原爆】

原爆とふ死の灰といふ歎くべき詞消えざらむわが国語辞書に

佐佐木信綱『秋の声』1956年

人に語ることならねども混葬の火中にひらきゆきしてのひら

竹山広『とこしへの川』1981年

おそろしきことぞ思はゆ原爆ののちなほわれに戦意ありにき

竹山広『残響』1990年

一九四五年八月九日一時〇二分木の幹へ入りたるままの茶碗の破片

奥田亡羊『亡羊』2007年

エノラ・ゲイよりゆつたりと落下せしまだ罪知らぬ光のたまご

岩井謙一『隻眼』2010年

ファットマン落ちし時刻に鳴り響くサイレンの音に町は首垂る

碓博視『ざぼん坂』2015年

父と母の背や胸の火傷に湧く蛆を箸で捕りたり夏がまた来る

西田郁人『心の花』2016年8月号

原爆が落ちたる後も敵機の飛ぶ日々をわれらは生きて食いたり

前川多美江『水よ輝け』2017年

頭上には真つ赤な渦を巻く火の玉の原子雲をこれまで誰にも云はず

西田郁人『心の花』2018年8月号

皮膚爛れうつ伏してゐる人たちの背中を焼きき夏の陽射しは

馬場昭徳『夏の水脈』2019年

【神風】

神風と呼ばれし人らに大正の十年前後に生まれたる多し
白石研蔵『玄冬の月』 2013年
自爆テロはいま Kamikaze と呼ばれをり若く死にゆくことのみ似たる 松本実穂『黒い光』 2020年
神風の吹くを信じし少年が手に肉刺作り 鍬打ち下るす
水本光『うた新聞』 2023年8月号

【戦地】

ノモンハン、ミッドウエー、ガダルカナル、インパール、レイテ、沖縄、東京オリンピック

服部崇『新しい生活様式』 2022年

【終戦・敗戦】

わが心くもらひ暗し海は山は昨日のままの海山なるを

佐佐木信綱『山と水と』 1951年

くさぎの花咲けりしは終戦の日の記憶年々にしてしか思ひつつ

石川不二子『水晶花』 1996年

変節も生くるためらし教師らの詫びひとつなく戦争終る

由田欣一『醉生夢死』 2019年

停車場を残しわが町全滅すと疎開地に聞きし敗戦の日よ

幸野稔『若きらもまた』 2022年

【玉音放送】

かしこみて玉音放送聴きてぬし祖父再びの敗戦に遇ふ

西原照子『武蔵野』 1984年

幾百度マイクの前に立ちし身のこれぞ最後の八月十五日

下村海南『終戦秘史』 1985年

【戦死者】

戦に召されし我が子帰りこで今年の秋もたでの花ちる

佐佐木信綱『思草』 1903年

爆死の祖父、被爆の父のその裔のわが指先につなぐ子の指

馬場昭徳『河口まで』 1999年

今もどこかで戦争に死ぬ若者が居て教室に空席二列

佐佐木幸綱『はじめての雪』 2003年

六月にだけ戦争は語られて戦死し続ける二十万人

屋良健一郎『平成じぶん歌』 2019年

真夜中のチーズをかじり米兵の月間死者数の記事を読みをり

梅原ひろみ『開けば入る』 2019年

【英霊】

英霊の生きてかへるがありといふ子の骨壺よ振れば音する

柳原白蓮『地平線』 1956年

【遺族】

どの人もまた遺族なり摩文仁野にハイビスカスの花を見上げて

佐藤モニカ『夏の領域』 2017年

【慰霊碑】

モモタマナの木陰の慰霊碑 ウシという名前いくつもぎざまれし村

千人に足らない町の公園にヴェトナム戦の慰霊碑があり

清水あかね 『白線のカモメ』 2020年

【戦争孤児】

青木泰子 『幸いなるかな』 2022年

戦争孤児の話をしんと聞くときの息子するどく耳を立てつつ

大口玲子 『ザベリオ』 2019年

【敵兵】

高山邦男 『インソムニア』 2016年

人間を殺してもいいその人がもし戦場の敵兵ならば

【帰還兵】

伊藤一彦 『月の夜声』 2009年

三割がPTSDといふ帰還兵 残る七割の「正常」思ふ

【兵服】

保坂耕人 『一隅』 1965年

兵服の古きが吾の野良着にて帰り来し娘と庭に薪割る

【戦後】

安藤美保 『水の粒子』 1992年

「戦後は終わった」と言いしは誰かじりじりと埃の街にバス待ちており

【戦争へのさまざまな思ひ】

前川佐美雄 『植物祭』 1930年

戦争のたのしみはわれらの知らぬこと春のまひるを眠りつづける

斎藤瀏 『波濤』 1939年

杞憂とのみ打ち消すべきか支那事変長びかば取り返しつかぬ事も起らむ

川田順 『鷺』 1940年

此の戦争我等の生ける世はおろか次の時代に続くおもひす

佐佐木治綱 『続秋を聴く』 1960年

あかあかと燃ゆる炉辺に手をかざししみじみ怡し戦ひなき日

竹山広 『葉桜の丘』 1986年

われの世に戦争ありき次の世のなほおほいなる戦争のため

戦争は巨大なる無為と知るまでのかなしく永き昭和史を閉づ

築地正子 『みどりなりけり』 1997年

谷岡亜紀 『闇市』 2006年

国家とは塩壺なのか 戦争に手足なくした物乞いの群れ

駒田晶子 『銀河の水』 2008年

戦争を見ている家族 われら四人いつか見らるる家族になるか

黒岩剛仁 『野球小僧』 2019年

明日にも戦争始まる世界生く甥たち初の鉛筆削り

俵万智 『未来のサイズ』 2020年

健康のためなら死ねるといふように平和を守るための戦争

22

乗り物

田中拓也選

明治・大正・昭和・平成・令和の「乗り物」の短歌を見つめることは、近代以降の私たちの生活を見つめなおすことに他ならない。

【汽車・電車】

東京に近づく汽車に日は暮れて埼玉あたり野の灯さびしも
寝台車窓かけ少し引きて見れば月は寂しく吾と共にくる
須田町の焦土のよるの霧雨に電車まつ群の一人なりけり
模範軌道区間に入りて汽車の揺れの全くなくなり心なごむも
どの蓋もつらら短くしたたらす貨車が響をあげて入り来つ
涼をとる輔に五人の乗客をみな殺しにしたくはないか車掌よ
雲仙岳に没る陽が見ゆるシルバートに坐りてみれば猫のごと鬱

築地正子『みどりなりけり』 1997年

佐佐木幸綱『呑牛』 1998年

本田一弘『銀の鶴』 2000年

玉井慶子『黙約の譜』 2008年

田中薫『土星蝕』 2019年

田中徹尾『吟』 2020年

【新幹線】

運転室の窓に当りて融けてゆく鳥ありハンドル握る手さむし
新幹線の窓より見ゆる道あまたその一つだに我は踏まざる

西田郁人『漂鳥』 1998年

黒岩剛仁『トリアージ』 2006年

【地下鉄】

むらさきの半蔵門線みずくぐりすいてんぐうにちかづきにけり
窓黒き地下鉄なれば美しく眠る女のうなじ見ている
佐佐木幸綱『アニメ』 1999年
黒岩剛仁『天機』 2002年

【自動車】

行く方によるこびあらん葦くさき男がわれのくるま操る
真鍋美恵子『密糖』 1964年

【タクシ―】

タクシ―の運転手殿に放屁され窓を開ければ夏来ていたり
縁ありて品川駅まで客とゆく第一京浜の夜景となりて
黒岩剛仁『トリアージ』 2006年
高山邦男『インソムニア』 2016年

【バス】

花のもとで午後四時のバスと擦れ違ふ昨日の私が乗つてゐるはず
一人バスの後部座席にまどろめば嗚呼ふるさがあるやうな夢
斎藤佐知子『風峠』 1994年

矢部雅之『友達ニ出会フノハ良イ事』 2003年

大いなる永遠の遅刻思ひつつわが遅刻確定のバスに乗る
大口玲子『ひたかみ』 2005年

運転手おらぬ車輻に我ら乗る運転席にモリゾーがいる
松井久雄『オーロラを見に』 2006年

一人づつ客を拾ひて南下するバスに拾はれダナンを發てり
梅原ひろみ『開けば入る』 2019年

観光バス次々と過ぎわれもまた見らるる土地の一人となりぬ
佐藤モニカ『白亜紀の風』 2021年

【鉄道馬車】

須田町まで鉄道馬車のかかりしを見せにぞ行きし泣くをすかしつつ
佐佐木信綱『瀬の音』 1940年

【三輪車】

三輪車の荷台にうたひつつくだる山の正面にかかる蠅座
石川不二子『牧歌』 1976年

【バイク】

100km/hで本田飛ばせば超都市の欲望よ飢餓よ真夜中の祭
谷岡亜紀『臨界』 1993年

【自転車】

のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ「まつすぐ?」、そうだ、どんどんのぼれ

佐佐木幸綱『金色の獅子』 1989年

おぼれゐる月光見に来つうみがう海号とひそかに名づけゐる自転車に
ベビーカーをおほへるモスリン風に揺れ子育てのまだ入口にあり
【セニアカー】 佐藤モ二カ 『夏の領域』 2017年

倒れてより妻娘に従ふほかになくセニアカーにて過疎地を巡る
【車椅子】 宮本勝人 『霧中航法』 2010年

患者らの漕ぐ車椅子ゆつくりと森の方へと光をはこぶ
【フォークリフト】 松岡秀明 『病室のマトリョーシカ』 2016年

工場の銀河を進む宇宙船フォークリフトで夜道を走る
【舟】 奥村知世 『工場』 2021年

玉川や二子の渡／ふな人のさす手とどめて／きく雲雀かな
うねり浪舟を揺りすぎまなかひにたかまり行けるその真蒼さよ
風まともに真帆にあたりておもしろう矢の如はしる月夜のわが舟
佐佐木信綱 『遊清吟藻』 1930年

メナムゆく舟の朝風撫でゆけば触れたし君が若き前髪
玉井慶子 『メナム行く』 1974年

【船】 わが船を真中にすゑて／丸く丸く波の輪をかき／さ霧立ちのぼる
石樽千亦 『潮鳴』 1915年

新しき船のさし板檣ひのきいた朝日にてらふ波のただなか
新井汎 『微明』 1916年

やはらかき船のふし床どに疲れ寝て津軽の海を荒れしとも知らず
新井汎 『微明』 1916年

ゆれゆるる軍用船のデッキに佇ち離る祖国を波の間ゆ見し
田中長三 『二葉ぐさ』 1956年

【飛行機】 早春の地表が見えるわが機窓ネバダアリゾナ今どのあたり
青木泰子 『とこしへの道』 2005年

成田から飛び来しものに黄の帽子、水色の靴、透明な神
佐佐木幸綱 『百年の船』 2005年

降りくる機翔びたつ機あまた練習機のかるがるとしてあそべるがごと
栗原潔子 『寂寥の眼』 1941年

私が乗れる飛行機の影は山を越え谷を渡りて追ひきたるなり
下村海南 『天地』 1929年

フランスに向かふフライト鳥葬のシーンを何度も画面に映す
服部崇 『新しい生活様式』 2022年

整備士のオーケーサインの親指に支えられてる此の機と俺は 時任勝正「心の花」2023年11月号

【驢馬】

老酒ラオチウの酔心地よしさ夜風にわが乗る驢馬の鈴が音もよし 佐佐木信綱『遊清吟藻』1930年

【新交通】

ゆりかもめゆるゆる走る週末を漂っているただ酔っている 俵万智『チョコレート革命』1997年

【馬】

馬に乗り海をゆく子が振り向きぬ触れえぬ波光のごとき笑顔に 俵万智『オレがマリオ』2013年

【観覧車】

途中では乗り降り許されぬ観覧車 曖昧なるままふたり高みへ 黒岩剛仁『天機』2002年

【パラグライダー】

五十年生きたるのちの或る朝に空から今日を見下ろしており 谷岡亜紀『風のファド』2014年

【エレベーター】

二十秒先の未来を待っているエレベーターの中の私だ 武藤義哉『春の幾何学』2022年